

アトリエ 琉游舎 だより 223号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2026年1月28日日発行

大寒の大々とした月よかな 一茶

- 一年で最も寒い大寒の頃は空気が乾燥して澄んでいるため、月がくっきりと見えます。その澄み切った空気の中で月が「大々とした」圧倒的な存在感で大きく輝いています。「だいかんのだいだい」の「だい」の音韻が重なり、さらに月の存在の大きさを表現しています。
- 月の光は太陽と同じように平等に誰の上にも等しく降り注ぎます。太陽はそれ自体が昼間を作り出す働きがあるので、昼間の明るさの中では太陽を殊更に見ることも意識することもないかも知れません。しかし今と違って昔の夜は真っ暗でした。日中の太陽の光より闇夜に降り注ぐ月の光の方が、光としてより太陽の光よりも印象的だったものだと思います。
- 仏様の慈悲は光に喩えられます。「無量光」です。無量光の光は時間的にも空間的にも無限に広がる光です、特に浄土系の教えでは阿弥陀仏の無限の智慧と慈悲の光を指す言葉です。
- 「月影のいたらぬ里はなけれどもながむる人の心にぞすむ」浄土教の宗祖で仏教を権力者から民衆の宗教へと大変革をもたらした法然上人の和歌です。「月影」は阿弥陀仏の慈悲、つまり無量光です。無量光の光が降り注がない「里」はありません。生きとし生けるもの全てに注ぎます。しかしその光を「ながむる人」でなければ、その光（慈悲）をいただき、心の中に留めることはできないのです。降り注がれた光（教え）を聞くことが信心なのです。
- 読書会を再開します。日本仏教の革命家法然上人の主著「**選択本願念仏集**」をテキストにして読書会を開きます。仏教が如何にして大衆のものとなっていったか、そしてこの書を徹底的に批判した日蓮聖人が何を批判し何を自らの宗教原理に応用していったかなどが理解できる論理明快な書です。仏教が今も私たちの心にすむ光であることが観えてくる書です。

写経会2月1日（日）13時半から

読書会を再開します

毎月二週・四週の火曜日 13時半

テキストは「**選択本願念仏集**」です。

2月10日（火）13時半から

狂言綺語…カミとホトケの出会いⅣ(承前)

「カミとホトケの出会い」についてこの場を借りて三回私の考えを書いてきました。学問的精査に基づく論述でもなく、また論証の瑕疵も検討しないままの乱暴な論旨であることも充分自覚した上での記述です。この論旨の基盤を作ったものは出家してからの宗教書の濫読と琉游舎を構えてからの九年に渡る共棲体験から導き出されたものです。その共棲体験は信行体験と呼んでもいいものです。今までその時々を経験を手がかりに自然を含むあらゆる他者との関係性を観ることで、縁起の法則の中にある、ありのままの今を、ありのままに受け入れ、ありのままに過すことを「願い誓い行う」日々を生きようと試みた末の記述です。その願いが叶うことが道の終点ではなく、その道を生きることを私は共棲あるいは信行と呼んで生きてきました。

その道の出発点には「カミとホトケの出会い」があったと言うことに、私は九年掛けて辿り着きました。それまでも、そう考える断片は時々狂言綺語で書いてきていましたが、それがはっきりと形となり、自らの信心の（生きることの）礎になっていることを発見したのは、皮肉なことに昨今の政治主張や宗教の現状に、言いようのない胡散臭さを感じたことでした。その原因は、とくに伝統や保守の標榜、信仰の自由、権利や平等や自由などの主張が、私の考える「カミとホトケの出会い」以来の日本人の精神と智慧の伝統に全く相反する考え方であるとはっきり認識できたことです。その伝統を無視した考え方が、いつ何処でどのような意図の下に捏造され、保守すべき日本の伝統とすり替えられたかを認識することが、私の「信行」の道を間違えないための重要なポイントなのです。なぜならば私は「カミとホトケの出会い」に日本人の「精神」と「智慧」の原点があると信じる、筋金入りの保守主義者である自覚の下に信行を生きる者だからです。

ここで保守伝統主義者である私の論旨を要約します。①カミは日本人の精神（情）である。②ホトケは日本人の智慧（知）である。③「情」は生きとし生けるものをカミと観て、その精神と繋がり他者との共棲を可能とした。④「知」はホトケの慈悲を教えとして受容し、他者への寛容と共棲の智慧を与えた。⑤「知」は諸行無常、縁起の法則に裏打ちされたもの。⑥「情」は全ての他者を八百万のカミと観る。⑦神仏習合は日本人の「知」と「情」の統合の具体的な表現。⑧この日本人の営みを私は伝統と呼び保守すべき日本人の精神と智慧の営みと呼ぶ。⑨明治維新の神仏分離令によって日本人の「知」と「情」は強制的に分断された。⑩それまで日本人になかった「意」の概念が輸入された。⑪日本人に西洋的な概念の「意」がなかった理由は諸行無常の思想が根底にあるから⑫西洋の「意」は絶対者の意思の実現（絶対善と絶対真）。それを人類は絶対神から委託されている。⑬日本人には絶対真も善もない。全ては「空」、「ありのまま」⑭日本人の意志は自己の「知」と「情」の営みをもって他者との関係の中で生きること。⑮それを「意」と呼ぶなら日本人の「意」は関係性の中の「行い」へと向かう自己の行為。⑯一方西洋の「意」は絶対神の意志の実現。⑰ホトケとカミは人に分け隔てなく慈悲と共棲の光を注ぐ、誰も選ばない、誰も排除しない。これがカミとホトケの与えてくれた真の「平等」。⑱西洋の絶対神が与える平等は選ばれし者への平等であることは自明。

有史以来カミとの「情」の交歓で過酷な自然を生き抜いてきた日本人は、外来者のホトケの「知」を移入して初めて独自の精神世界を確立したのです。これが私の考える伝統と守るべき日本人の姿です。生来のカミと外来者のホトケとの幸福な出会い（習合）です。しかし明治維新以降、その幸福な出会いは分断されて今に至りました。その結果何がもたらされたのでしょうか。端的に申し上げれば終わりなき侵略戦争と敗戦、その後80年の日本人精神の不在。さまよえる日本人です。なぜならば民主主義が絶対的な価値としてきた自己の存立基盤（自由・人権・平等）は西洋の「意」、絶対者の意志として作られた概念だからです。その基盤の「意」がない日本人にはその根本思想が理解できるはずもありません。だから西洋移入の民主主義の絶対的価値も理屈で理解しようとしても、精神の営みとして生来のものとはなり得ないのです。絶対者から与えられた「自由・人権・平等」の概念以前に、日本人にはホトケの慈悲と、八百万の精神が全ての生きとし生けるものに分け隔てなく注ぐ光がありました。それこそが真の自由と人権と平等の光ではないでしょうか。社会制度、社会統治のための絶対者意志（自由・人権・平等）は私たちの精神の営みには不必要なものだったのです。カミとホトケの出会いが願い誓い行う私たちの日々は、自己が他者との関係性の中で心安らかに豊かに過すことのできる寛容と慈悲と共棲の光に普く覆われた日々です。そのためには、必然的に真の自由と人権と平等の精神が自らのものとなっていなければ、その光を受け取ることはできないはずなのです。

声高に保守もどきを唱える回帰場所は明治維新です。そこからもう一度今に至った日本を繰り返すことが彼らの唱える伝統です。西洋が絶対意思の実現で作りに上げた社会制度と秩序とその思想を、再び移入の時代（明治維新）に戻り、当時の日本が折衷策として作り上げた、天皇制度、家族制度、社会制度、経済、外交、防衛政策をもう一度やり直すことで、強い日本を実現できると信じているようです。私はそこに回帰してもまた同じ歴史が繰り返されるだけだと思います。私たちは西洋精神の営みを我が物とすることができないこと、だから制度や思想を折衷して生きていかなければならないことをデメリットと考えるべきではないのです。日本人にだけ生来の精神として与えられた「カミとホトケ」は間違いなく世界で唯一のものです。そこから世界で唯一の日本ができあがるはずです。日本の折衷主義は大いなるメリット、オリジナルの無二の世界ができるはずなのです。そのためにはカミとホトケの出会いが営々と営んできた日本人精神の原点を自覚することが必要です。その精神活動に基づき他者（他の国々）との関係性を構築することは、日本人ならば可能です。なぜならカミとホトケは自己と他者の関係性を寛容と慈悲と共棲の精神で繋ぐ力があるからです。